性別人間と幽霊人間

颪金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
性別人間と幽霊人間

【Ｎコード】
Ｎ９６２８Ｚ

【作者名】
颯金

【あらすじ】
高校２年生へ進級を果たした安藤未来。
春になり、部活動の勧誘がスタートする中、未来は、勧誘先で従兄弟に再会する―――

プロローグ

吸血鬼、吸血天使、天界少年、魔界少年、人間天使……ここ数ヶ月で、色んな者に遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学んできた。

暁文のおかげで、自分に自信を持つことが出来た。

グレイのおかげで、自分の良さに気付く事が出来た。

瀬夏のおかげで、子供嫌いが治り、今は小さい子が可愛いと思えるようになった。

カラスのおかげで、素敵な彼氏を見つけることが出来た。

紅丞さんのおかげで、心から人を好きになることが出来た。

これからも、何かに遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学ぶだろう。……そんな気がする。

……って、いきなりエピローグのような感じになってしまったが、これはあくまでプロローグ。

今回は、幽霊体質になった人間と、久しぶりに再会した従兄弟の話。

噂話

4月。私は高2に進級し、紅丞さんは人間に戻り、無事に学校への復帰を果たした、月の後半。

「未来くーん！！大ニュース大ニュース！！」
朝。綾子が、人がまばらに集まった教室で、大声で、しかもあろう事か”くん”付けで話しかけてきた。
「綾子……あんたねぇ、いい加減にしないと私もそろそろ怒――」
「あーあー！説教なら後で聞くから！！それよりも大ニュースだよ！！」
「まったく……何？」
「1年生に、スッゴくカッコいい眼鏡の男子がいるんだって！！もしかしたら、佐川先輩以上かもよ！？」
カッコいい男子がいるなんて、正直な所、興味ゼロなのだが、”佐川先輩以上かも”と言う言葉に、少しカチンと来た。
「……紅丞先輩以上？」
「そう！！噂によると、近寄った女子はみんなその男子に惚れちゃうほどカッコいいらしいの！！……もしかしたら、未来も惚れちゃうかもよ！？」
綾子は何故か、ほかの誰よりも早く、私と紅丞さんが付き合ってる事と、同棲していることを探り当てた。私も紅丞さんも隠してたのに……もしかしたら、探偵にでもなれるのかもしれない。
「……あのねぇ、私は顔で紅丞先輩を選んだわけじゃないの。たとえ、その男子が紅丞先輩よりもかっこよくても、惚れるわけないでしょ。」
私は、紅丞さんの事は、家では”紅丞さん”だが、学校では”紅丞先輩”と呼んでいる。
「ヒューッ！ラブラブですねぇ安藤未来さん！」

「はいはい……。」
「……でさっ、私ね、今日はその男子に、会いに行こうと思うんだ。だからさ、未来も一緒に行かない？」
「わ、私も？……なんで？」
「本当に惚れちゃわないかどうか、確かめたいのさ！……ついでに、演劇部の勧誘とかしちゃえば？」
確かに、去年から、演劇部には女子の入部希望者が耐えない。……紅丞さんがいるのが原因なのは目に見えているが。
「でも、確かにこれじゃあ、演劇部がキャバクラになりかねないからな……うん、私も行くよ。」
「ありがとー未来ー。」
「で、その男子、なんて名前なの？」
「確かねぇ……津谷陸（つたに）って言うんだって。」
「津谷、陸……あれ？……どこかで聞いたことあるような……？」
「ん？もしかして、知り合い？」
「いや、多分気のせいだと思う……多分。」
「そっか。じゃあ放課後に津谷君の所に行ってみよー！！」
綾子は意気揚々と自分の席に戻っていった。

部活

私は今、演劇部の活動拠点――講堂にいる。
今の時期、演劇部は、活動してはいなく、色々な生徒に勧誘をしてまわっている……いわば、勧誘期間真っ盛りなのだ。で、今日は勧誘方法の作戦会議の真っ最中。
関係者以外立ち入り禁止なので、綾子には講堂の外で待ってもらっている。

会議終了。
ある生徒はそのまま帰り、ある生徒は勧誘に行った。
私は、ちょうど津谷陸の話を出したところ、そいつを勧誘しにいけと言われたので、綾子と一緒に行くことにした。

「ついた、ここだよ。」
1年3組の教室前に到着。
「でもさ、綾子。もう放課後だし、さすがに帰っちゃったかな？」
意外と会議が長引いたし、有り得るかも。
「いやいや、聞いた話によると、津谷君は、辺りが暗くなるまで帰らないらしいよ。もしかしたらまだいるかも。」
綾子はそう言いながら、教室の扉をノックした。
ガラッと、扉が開く。

「はーい？……あれ？」

そこにいたのは――見たことのある人物だった。

再会

噂の男子、津谷陸。
その容姿は、眼鏡をかけてはいるが、確かに顔立ちがよく、見た女子全員が惚れてしまうのも頷ける。
そして、彼の顔には、見覚えがあった。
「えっと……誰？」
彼は綾子の顔を見ながら質問した。
「私達、演劇部の勧誘で来たんだけど……。」
演劇部でも無い綾子が話し始めた。
「演劇部？」
「あっ、私は演劇部じゃなくて、こっちが演劇部なの。」
と、言いながら、綾子は私の方を見た。
「えっと、そっちの人は……もしかして、安藤未来？」
名前を言い当てられた。
やっぱり、私はこの人に会ったことがある。
「……もしかして、陸？」
「やっぱり、未来だよな！？」
陸の顔が一気に明るくなった。
「未来だぁー！久しぶりーっ！！」
そして、あろう事か、私に飛びついてきた。
「うわっ！？ちょっと、陸！離れなさい！！」
「え？あ、ごめんっ。」
陸は私から離れた。
その光景に、綾子は目を丸くしていた。
「え？え？……未来、津谷君と知り合いなの？」
「えっと……私の、従兄弟なの。」
「い、従兄弟ぉ！？…初耳なんだけど！？」

「私も、会うまで忘れてたのよ。」
それを聞き、陸が食いついた。
「未来、忘れるなんてひどいよ。」
「ご、ごめん……。」
なんか、綾子と陸って、キャラがかぶってる気がする……。
「……で？今日はどうしたんだっけ？」
陸がワクワクしながら聞いてきた。……従兄弟相手に勧誘って、なんとなく罪悪感が……。
「えっ…と、陸、何部に入るか決めた？」
「んー…まだ。」
「演劇部とか、どう？」
「演劇部ねー……まだ迷ってる。でも、未来が入ってほしいって言うなら、入るけど？」
「じゃあ、頼めるかな？」
「おう。……顧問に入部届け、出せばいいんだっけ？」
「うん、それじゃ、またね。」
「はーいっ。」
私たちは、講堂に戻ることにした。

報告

講堂に戻ると、紅丞さんが勧誘に行かせた生徒を待っていた。
「紅丞先輩！」
紅丞さんに駆け寄る。
「あ、やっぱり未来だったか。」
「”やっぱり”って、どういう事ですか？」
「未来の足音が聞こえたんだよ。」
「あ、そう言うことですか……。」
紅丞さんは、４月の始めから、月の中頃にかけて、ある事件が原因で、人間ではなく天使になってしまっていた――のだが、カラスのアイディアのおかげで、無事、人間に戻ることが出来た。
でも、完璧な人間ではなく、私のように、人間ではない力を持つ事になってしまったのだ。
その力と言うのが、「五感がランダムにパワーアップする」というもの。
簡単に説明すると、特に何もしていないのに、聴覚・嗅覚・味覚・触覚・視覚のうちどれかが、ランダムに選ばれ、飛躍的にパワーアップしてしまうということ。
……パワーアップの限度は決まっているようなのだが、どのタイミングで、何をパワーアップさせるのか、は選べないようで、本人はいまだに慣れることが出来ずに困っているらしい。
この前なんか、睡眠中に聴覚がパワーアップしてしまって、自分の心臓の音が邪魔で一睡も出来なかった、と語っていた。

「……てことは、今、聴覚がパワーアップしてる、って事ですか？」
私は綾子から離れ、綾子には聞こえないくらいの小声で質問した――小声でも、今の紅丞さんには普通の音量に聞こえるだろう。

「ああ。……ついでに言うと、嗅覚もパワーアップしてる。」
「それは、大変ですね。」
「大丈夫だよ。」
小声で会話する私たちの後ろで、綾子がニヤニヤしながら私たちを見ていた。
「……ちょっとすみません。」
紅丞さんに断りを入れ、綾子の元へ向かう。
「ちょっと、綾子。何ニヤニヤしてんのよ。」
「いやぁー、小声で何話してんのかなーなんて思って…。」
「別に、何でもいいでしょ？……気にしないでよ。」
「カップルの会話ほど気になるものはないよ？」
「はぁ……ったく…。」
「で？先輩に津谷君の事、言った？」
「あ、言ってなかった。」
「…未来ぃ、最近凡ミス多いよ？幸せ疲れですかぁ？」
「嫌みったらしく言わなくていいから。」
とりあえず先輩の所に戻る。
「……紅丞さん、聞いてました？」
また小声で話しかける。
「ああ。……新入部員か？」
「はい、それも、私の従兄弟なんです。会うのは…だいたい、５年ぶりくらい何ですけどね。」
「へぇ……従兄弟…。」
…何故ジト目……。
「私、別に浮気しませんから。」
「まぁ、それなら良いけど……。」
すると――
「あっ……。」
「どうしました？」
「嗅覚が元に戻った……。あ、でも視覚がパワーアップした……。」

「……なかなか休まりませんね。」
「ああ…本当、困ってるよ……。」
その時、
「未来ー、何してんのー。」
しびれを切らした綾子が私を呼んだ。
「……なんか、すみません。やっぱり綾子は帰らせるべきでしたね……。」
「いや、別に大丈夫だけど……。」
私は再び綾子の元へ行った。
「……未来くん、愛し合うのは構わないが、私の存在を忘れないでくれよ？」
「わかってるよ……。」
「……じゃ、私、用事思い出したんで、帰るよ。後は2人でお幸せにー。そんじゃっ。」
綾子はカバンを持って帰ってしまった。
「なんなのよ、まったく……。」
「未来。」
後ろから紅丞さんが私を呼んだ。
「何でしょう？」
「俺たちも、もう帰るか。」
「でも、ほかの部員を待たなくていいんですか？」
「いや、ほかの奴らは、さっき帰った。」
「え、じゃあ私が最後の1人って事ですか？」
「そう言うことだ。……じゃ、帰るか。」
紅丞さんは、近くにおいてあるカバンを持って歩き出した。――私も後に続いた。

手紙

「紅丞さん、ちょっと、教室に行きたいんですけど、良いですか？」
「忘れ物か？」
「はい。……ノート忘れちゃって。」
「わかった、一緒に行くか。」
「はい、ありがとうございます。」
俺と未来は、２年４組の教室に向かった。

「ちょっと待っててくださいね。」
未来は俺を入り口に残し、教室に入った。
窓側の、一番後ろ。恐らくそこが、未来の席だろう。
「……あれ？」
机の中を探していた未来が、そう呟いたのが聞こえた。
「未来？どうかしたのか？」
「なんか、手紙が入ってるんです……。」
手紙？まさか……ラブレター？
俺はとりあえず教室に入った。
「あ、勝手に入っちゃダメですよ。」
「いいだろ……で、手紙ってなんだ？」
「これです。」
未来が机から出したのは、茶封筒に入った手紙だった。……ご丁寧に、封に糊付けされている。
「誰からだ？」
「差出人が書かれてないんです……開けて見ますか？」
「未来が見たいと思うなら、開けてもいいんじゃないか？」
「では、失礼して……。」
未来は指で器用に封筒を開け、中から手紙を取り出した。

「な、何？これ……。」
未来の顔が真っ青になった。俺も手紙を覗いてみた。
手紙には、まるで血のような真っ赤な字で、”お前に絶望を味あわせてやる。”とだけ書いてあった。
「不気味だな……。」
「一体誰が……。」
未来は脅えるように、封筒に手紙をしまった。
「未来、そんな物、捨てた方がいい。どうせ誰かのイタズラだろ。」
「そう……ですかね。」
「ああ。…何かあっても、俺が守ってやる。」
「紅丞さん……ありがとうございます。」
未来は、手紙を封筒ごと、くしゃくしゃに丸めてゴミ箱に捨てた。
「……それでは、帰りましょうか。」
「ああ。」
俺たちは玄関へ歩き出した。

…誰かのイタズラにしては、やり過ぎだと思う。だって、あの手紙の字……未来には言えなかったが、俺は今、視覚がパワーアップしているので解る。

あの字は、どう見ても――人間の血で書かれていた。
……妙な胸騒ぎがする。

帰る前に……

「紅丞さん、聴覚、今どうなってます？」
玄関で、未来が俺に質問する。
「まだパワーアップしたままだ……。」
「そうですか……それでは、聴覚が戻るまで、少し待ちますか？今外にでると、車が凄いみたいですし……。」
確かに、玄関からでも、外の車の走行音が耳に入る。
「そうだな……少し待つか。」
とりあえず、廊下にあるベンチに、二人で腰を下ろした。
……しばしの沈黙。遠くにある体育館からは、バスケットボールが弾む音が聞こえる。多分、バスケ部が部活中なのだろう。……それよりも……
「……未来。」
「何ですか？」
「もう少しくっついてもいいんじゃないのか？」
未来は何故か、俺から３０ｃｍくらい離れた所に座っていた。
「いや、だって、私が近寄ったら色々面倒になるかな、と思いまして……。」
「面倒？…どういう意味だよ？」
軽く未来を睨む。
「いや、その……紅丞さん、今聴覚がパワーアップしてるんですよね？じゃあ私が近寄ったら、私の心臓の音が聞こえて、耳障りかなーと思いまして……。」
未来は申し訳無さそうに答えた。
「はぁ……今更何言ってんだよ。」
「えっ…？」
「俺は、例え未来の心臓の音が絶えず聞こえるような環境に置かれても、その音さえも愛せるという自信があるぞ。」

「……。」
未来の顔が赤くなった――可愛い奴だな。
「あ、ありがとうございます……。」
未来は恥ずかしそうに、俺にくっつくように座り直した。
―トクッ、トクッ――……直接聞いてるわけじゃないのに、未来の心臓の音が鮮明に聞こえる。……もちろん俺自身の心臓の音も鮮明に聞こえる。
実は、脈拍が違う2つの音が、偶然重なる時があるのだが、俺はその音が好きなんだ。……未来には内緒だけどな。
「…ふふっ……。」
つい、口元が緩んでしまった。
「紅丞さん？……今、笑いました？」
「いや、ちょうど、未来と俺の心臓の鼓動が、ほぼ同じくらいのタイミングで重なってて……なんか面白くて…。」
そう言った途端、未来の心臓の鼓動が速まった。……ああ…タイミングがズレていく……。
「おい、何照れてんだよ、タイミングがズレたじゃないか……。」
「うっ、うるさいです。気にしないでください……。」
「そうは言っても、聞こえちまうしなぁー…。」
俺は嫌みっぽく答えた。
「……やっぱり私、離れた方がいいですか？」
「いやいや、そんなこと言ってないから。」
「でも……。」
その時――
キィーン……
酷い耳鳴りが俺を襲った。
「っ……。」
思わず頭を抑える。

「紅丞さん？……どうしたんですか？」
「いや、ちょっと耳鳴りが……。」

数秒後、ようやく耳鳴りが止んだ。
と、同時に、心臓の音が聞こえなくなった。
「……聴覚が元に戻ったみたいだ。」
「そうですか。……それじゃあ、帰りましょうか。」
未来は立ち上がった。……俺も後に続いた。

帰り道

「未来、手、繋ぐか。」
急に、紅丞さんからそう言われた。
「……今はほかの生徒もいないみたいですし…良いですよ。」
私は、無防備だった紅丞さんの右手に自分の左手を――俗に言う、”カップル繋ぎ”してやった。
「え？こ、これって、カップル繋ぎ？」
紅丞さんが予想以上に焦っている。
「何焦ってるんですか？紅丞さんから誘ったんですよ？」
「いや、そうだけど……。」
紅丞さんは恥ずかしがって俯いてしまった。……なんか可愛い。
「さぁ、行きましょうか。」
私たちは家に向けて歩き出した。

「そういえば、紅丞さん。」
「何だ？」
「今、視覚がパワーアップしてるんですよね？」
「ああ……2キロ先の道路標識が見える。」
「視覚がパワーアップするって、視力が上がるだけなんですか？」
「いや、高速で動く物が見えたり、見えちゃいけない物が見えたりする。」
「見えちゃいけない物って、何ですか？」
「それは、アレだよ、その……忘れてくれ。」
「嫌です、教えてください。」
「……。」
「紅丞さん？」
「お、俺は悪くないぞ。視覚が勝手にパワーアップするから――。」

「言い訳なんて聞きたくないです。何が見えてるのか教えてください。」
「……。」
次の瞬間、紅丞さんは私の手を振りほどき、走り出した。
「あっ！！紅丞さん、逃げないでください！！」
紅丞さんは、男のくせに体力がそんなに無い。……女とはいえ、中学時代は空手を習っていた私に適うはずがなかった。
私は紅丞さんの腕を掴んだ。
「ほら、捕まえましたよ！！」
「！？……お前速すぎるんだよ！！」
「紅丞さんが遅いんです！！さぁ、もう逃げられませんよ！」
「頼む！許してくれ！！」
「許す許さないの問題ではなく、言う言わないの問題でしょう！？」
「っ……じゃあ、言わない！！」
子供か、まったく……でも、私もそろそろ気にし過ぎかもしれない。
「はぁ……わかりました。このことは忘れます…。」
「助かった……あっ…。」
「どうしました？」
「視覚が元に戻った……。」
「てことは、今は普通の状態ってことですか？」
「……いや、触覚と味覚が一気にパワーアップした…。」
「触覚って、ヤバいじゃないですか。」
「風が身体に当たって痛い……。」
「大丈夫ですか？…早く帰りましょう。」
「だな……。」
紅丞さんは痛みに耐えながら、足早に帰宅した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9628z/

性別人間と幽霊人間

2011年12月30日01時47分発行